

「方法叙説」をめぐる六つの試論

一種の奇書と呼べるかもしれない。デカルトの著「方法叙説」の冒頭部分のみまつわる、根源的な読解の試みである。しかもそれは、18歳「同輩出合い」、90歳で没するまでの、気の遠くなるような思索の跡なのだ。

「全支を論ずるには何百年かかっただけでしょう。そんな計算は一切していません。数字にはまるで疎く、わが子の誕生日や自宅の電話番号も覚えないうえに。父・小林利夫氏の遺稿集を出版した仏文学者の徳永雅さんは、往時をいとおしげに振り返る。

徳永 雅さん

こばやし・としお 1919年神戸市長田区生まれ。54～2009年「小林利夫フランス語教室」を開講。10年1月死去
とくなが・みやび 1966年芦屋市生まれ。関西学院大講師。大阪府池田市在住。

神戸市長田区の種物商の長男として生まれた小林氏は、賢敏を病んだ神戸二中現・兵庫鷹を中退。数千の書物のレコードに囲まれて療養生活を送った。以後、自由な向学心は日本の古典や仏教思想、能楽、論語を多方面へ。そして18歳のときに読んだデカルト全集が西歐への目を開く。

「良識はこの世でもっとも公平に配分されたものである」小林氏の探究心はまず、一般にこう詠される有名な書出しに向かった。良識とは、配分とは、さらにこの最上級の意味は

「一語ずつを定義し直し、語法の背景に潜む西歐的概念を見極めて、新しい訳文を与える。デカルト自身の言葉にもある「極めてゆつくり歩む」というやり方で、真の理解へ迫っている」。

「大正生まれですから文法はやや硬く古風だけれど、内容や手法はむしろ新鮮。フランス語や哲学だけでなく、この本が広く西歐文化を学ぼうとするの入り口になればうれしい」と徳永さん。

研究の一方、小林氏は1954年、神戸で戦後初の仏語教室を開講。その指導もまた文法を重視し、粘り強く原書に挑むものだった。教え子は約1000人を数え、70人余りがフランス留学へ。76年には仏政府からパルム・アカデミック勲章シュバリエを受ける。

破格な学生生活を交えたのは妻・美彌子さん。3人の子育てをしなが、デザインとして働き、夫の教壇運営をも助けた。小林氏に先立つ一昨年春に他界。本書の刊行を後押ししたのも、美彌子さんを徳永会に集めた教え子らだった。「最後まで父の仕事のおせん立てをしとれたのですね」。そんな出版の経緯もまた希有な一書だ。

（平松正子・文化生活部）
「『方法叙説』をめぐる六」の試論は春秋社・3800円

亡父70余年の思索の跡

著者に聞く



「生き方そのものが哲学のような父でした」と話す徳永雅さん＝神戸市灘区